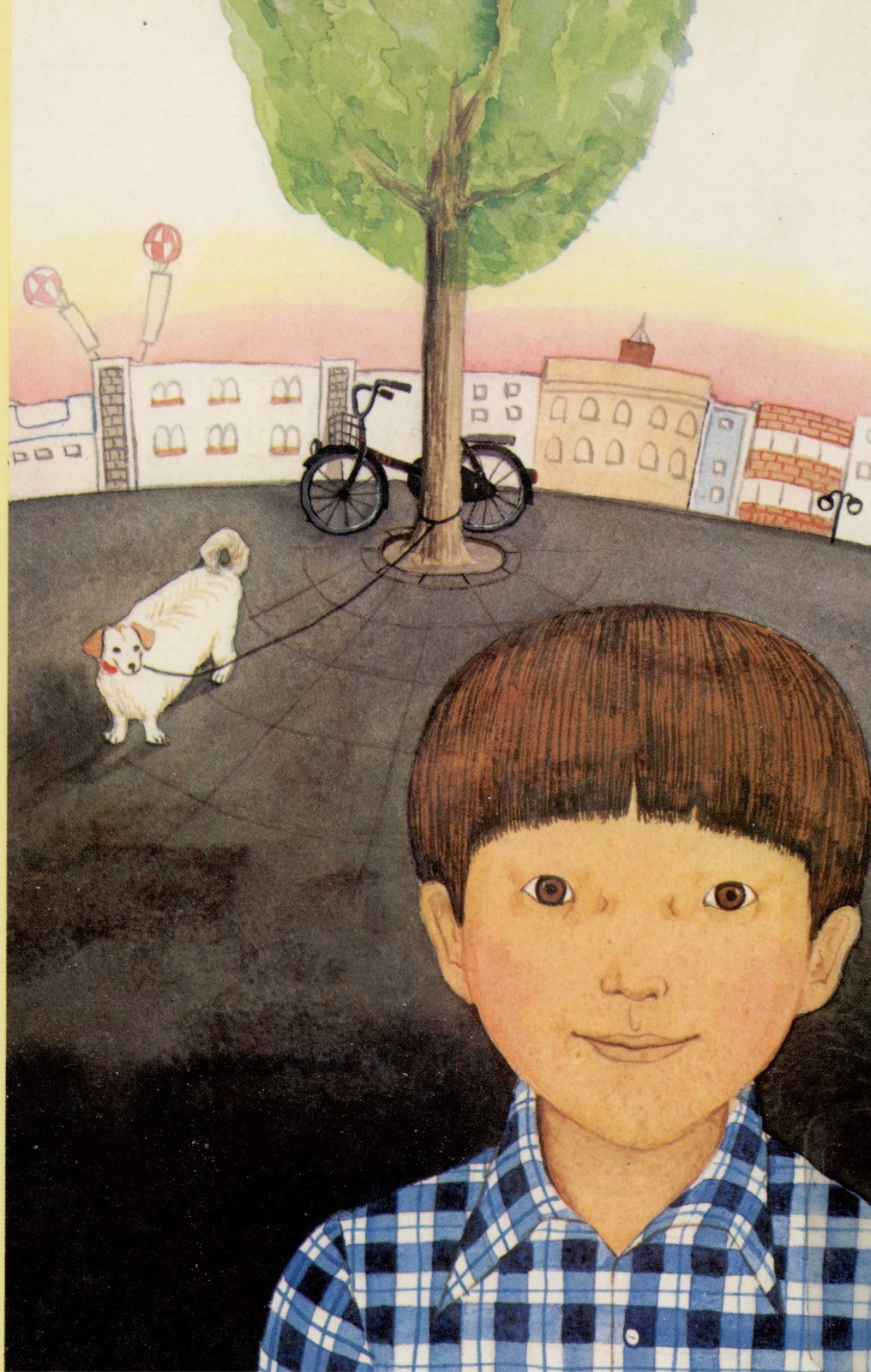
あつのは いつも夕方

佐々木赫子 作
広野多珂子 画



あうのはいつも夕方

佐々木赫子　作
広野多珂子　画

童心社

◁作　家▷
佐々木赫子（ささき かくこ）
1939年神戸市に生まれる。岡山大学教育学部卒業。日本児童文学者協会会員。〈てんぐ〉同人。「あしたは雨」で第8回日本童話会賞受賞。著書に『旅しばいのくるころ』（偕成社刊・第16回厚生省児童福祉文化賞・奨励賞受賞）。
現住所　東京都日野市多摩平3—243—406

◁画　家▷
広野多珂子（ひろの たかこ）
1947年岡崎市に生まれる。1974年渡欧，主にスペインに滞在，マドリッドのヒルクロでページャス・アルテスに学ぶ。1975年帰国。1976年第3回蒼樹会新人選抜展週間賞受賞。1978年個展開催。1978年女流画家協会展出品。挿画の仕事は本書がはじめてである。
現住所　埼玉県大宮市寿能町2—198—1
寿能団地5—404

あうのはいつも夕方

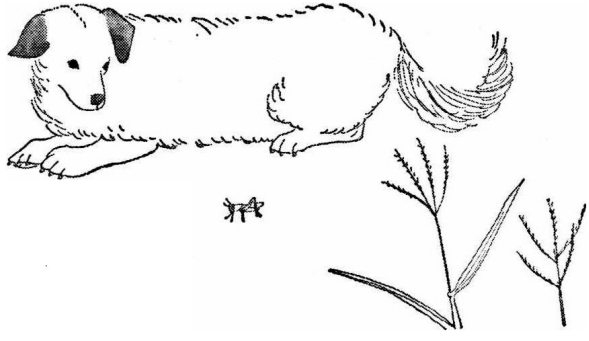
1979年7月10日　第1刷発行
1980年7月20日　第5刷発行

作　家　佐々木赫子 ©
画　家　広野多珂子 ©
発行所　株式会社　童心社
東京都新宿区三栄町22
電話 03（357）4181（代表）
振替 東京1-75504

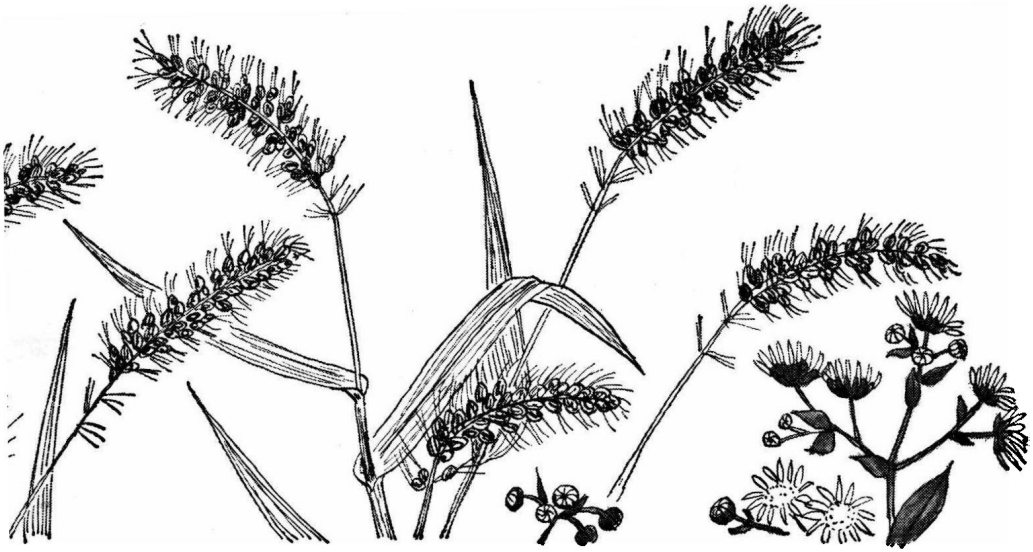
印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　文勇堂製本株式会社

NDC913／©1979／176p／21.6×17.6cm
8393-460317-5253 Printed in Japan

もくじ

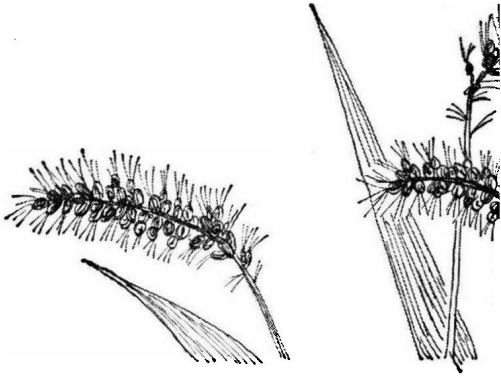


1 ボリスという犬……6
2 十一階の家族……19
3 黒うさぎの少女……31
4 たのしい夕方……48
5 事故……60



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6 くらい夜道……77
7 ミルキーがおこった……94
8 親友……109
9 川原へ……118
10 ボリスの病気……136
11 話しあい……146
12 黄金色の夕ぐれ……157
あとがき 174



ゆうのはいつも夕方

1　ボリスという犬

それは、みっともない犬だった。

はじめてあったのは、うら通りでだ。夏のおわりの夕方だった。

久生は、山梨へ転校していった和彦のことを考えながら、歩いていた。

来週ひっこすことになったと、和彦が知らせにきた晩のことを思いかえしていた。

……その晩、十一階の久生の家まで、和彦が息をきらせてのぼってきた。

和彦の家も、おなじアパートの七階にあった。

エレベーターが、ちっともこないんだもん。階段かけあがってきちゃったよ。うちのパパ、きゅうに転勤がきまったんだ。来週ひっこすの。山梨ったって、ちかいぜ。新宿から特急で二時間だもんな。またすぐあおうや。あ、これ、久生ちゃんにあげる。

げんかんのドアの外で、はや口にそれだけいうと、和彦は久生の手にプラモデル

のブルートレインをおしつけて階段をかけおりていってしまった。和彦は、興奮していた。

久生は、親友がとおくへいってしまうというショックで、ひとこともいえなかった。

久生の出した最初の手紙に、和彦の返事がすぐきた。

しばらくして、久生はまた手紙を書いた。

その返事は、まだこない。……

うら通りのせまい道を、はじめ犬がやってくるのが見えた。つぎに、へいのまがり角から、少女がひとりかけ出してくるのも見えた。

四年か五年か、たぶん、久生とそう年のちがわない少女だ。

少女は角をとび出したところで犬にぶつかりそうになり、かなきり声をあげた。

「きゃあっ！」

犬はおどろいて、よことびにはねあがった。

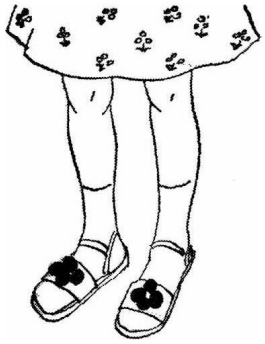
それを、とびつくとでも思ったのか、少女は、

「いやっ。しっ。あっちいけ。」

と、こぶしをふりあげる。
犬はしっぽをさげ、まごまごと道路のはんたいがわへにげようとする。
「ぼくちゃん、その犬を、つかまえて。」
ぽかんと犬を見ていた久生は、その声にふりかえった。
さっき犬のきたほうから、年とった女の人がいそぎ足にやってくるところだった。
「ぼくちゃん。その犬のひもをつかまえて。」
久生は、ぼくちゃんとよばれるのがきらいだ。他人のしゃぶりかけのアメを、むりに口におしこまれるような感じがする。
だから、ぼくちゃんとよばれると、たいてい聞こえないふりをすることにしている。
しかし今、息せききった老婦人に知らん顔をするのは、わるい気がした。
久生はとおまわりして、犬のひきずっている革ひものはしにちかづき、そっとふんだ。そうされても、犬はおこって久生にむかってくるふうではなかった。ひもをひろって老婦人にわたした。
「ありがとう、ぼくちゃん。——ごめんなさいね、おじょうちゃん。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

久生は、はにかんでだまっていた。少女も、なにもいわない。
「いたかったでしょ、おじょうちゃん。どこを、かまれました？　ごめんなさいね。」
老婦人は、わびの言葉をくりかえしながら、革ひものはしで犬をぶちはじめた。
「ばか。人さまをかんだりして、だめじゃないの！　このばか犬！　ばか、ばか。」
老婦人は、なん度もなん度も犬をぶつ。
ぶたれるたびに、犬はこわそうに目をしばたたき、耳を頭のうしろにぴったりはりつける。
からだをちぢめて、地面にはいつくばってしまう。
久生は、ひもをわたしたら、すぐいってしまうつもりだった。
けれど、犬のそのようすを見ると、立ちすくんでしまう。みぞおちが、きゅうにしめつけられてくる。
それは、でぶでぶふとったみにくい犬だった。からだの大きさのわりには、足がへんにみじかい。毛並みはもとはクリーム色だったかもしれないが、今は、よごれて灰色のぼろぞうきんみたいに見える。



「かまなかったよ。」

久生は、思わずそういってしまった。

「ぼく、見てたもん。」

ぶつかりそうになったのは、女の子のほうだよ。犬は、なにもしなかったよ。

しかし、久生はふるえ声で、

「いい子だよ。その犬。」

というのが、やっとだった。

久生は、だれかをなぐったことも、なぐられたこともない。犬がぶたれているのを見て、気分がわるくなっていた。

「おや、そう。」

老婦人は、ぶつのをやめた。

「おじょうちゃん。あなたねえ、あんまし、おおげさな声ださないでちょうだい。犬がかんだのかと、思うじゃありませんか。」

老婦人は、ふきげんに少女にいう。

そして、犬のひもをぐいとひっぱって歩き出した。

「散歩はおしまいだよ、もう。主人の手をふりきってにげるばか犬は、もう二度と散歩には、つれてってもらえないんだからね。」

犬は老婦人におこられながら、ついていく。

犬が、ふとふりかえった。久生と

目があう。犬の目はからだつきにあわず、やさしげで美しかった。
久生は、ふらふらと犬のあとをおって歩き出す。なぜそうなったのか、わからない。
これまで、犬に興味をもったことは、ない。
三十メートルほどいったところで、老婦人はふりかえって、久生をじろじろ見た。
「ぼくちゃんの家、こっちのほうなの。」
久生は、どぎまぎする。
「うん。ううん。」
久生の家は、駅前の大通りのむこうがわだ。老婦人のいくのとは、はんたい方向になる。
老婦人は久生の家がどこにあるか、それ以上たずねようとはしない。
「ぼくちゃん、犬がすきなの。」
「すきかどうか——ぼく、わかんない。」
「あたくしは、きらいですよ。」
老婦人のはき出すようないいかたに、久生はびっくりする。

「犬の世話なんて、もうたくさん。」
老婦人は、電柱のにおいをかごうと立ちどまった犬を、あらあらしくひっぱる。
「さっさとお歩き。おまえをひきずって歩かなきゃならないから、うでがいたくなるんだよ。」
犬は、電柱に片あしあげかけたままひきずられる。ひきずられながら、小便をもらす。
久生は自分がのしられているような、いたたまれない気持ちになる。
「あの、ぼく、犬のひもをもちましょうか。」
「おや、そう。ありがたいこと。」
老婦人は、あっさり革ひもをわたす。
「この犬、なんて種類ですか。」
なにか話しかけなければわるいような気がして、久生はそういってみた。
「雑種ですよ、雑種。どうせなら、血統書つきのいい犬をくれりゃよかったんですがね。」
老婦人は久生がたずねもしないことまで、いっきにしゃべり出した。

それは前は、むすこのつとめさきの人がかっていた犬だったというのである。
かい主は、仕事のつごうで外国へいくことになった。そこで、老婦人のむすこが犬をもらってくれとたのまれた。
子犬ではなくて、すでにおとなの犬だった。
「ところがなんと、こんどはうちのむすこもカナダへいくことになっちゃって。——バンクーバーってとこですよ。支店長代理でね。」
むすこのことをいうときだけ、老婦人は笑顔になる。
むすこ夫婦がカナダへいってしまって、半年ちかくになる。
老婦人は犬とふたりきり、とりのこされた。
「自分が外国へいく番になったときには、だれひとり、この犬のもらい手がないしまつですからね。そりゃ、こんな雑種のぼろ犬、もらってやろうなんてお人よしは、うちの子ぐらいのものでしょうよ。」
老婦人にがまんならないのは、犬の前のかい主のことだった。
その人は、老婦人のむすこといれかわりに日本へかえってきた。それなのに、犬をひきとろうとしないのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com